

柿生文化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
 住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
 柿生中学校内
 電話:070-1503-6401、044-988-0004
<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>
 第115号

第70回 カルチャーセミナー 特別寄稿

小島一也先生の遺徳に懐う

板倉 敏郎

平成26年12月5日、小島一也先生がご逝去されて、早3年の歳月が経とうとしております。

私が初めて先生にお会いしたのが平成17年4月ですから約10年近いおつきあいでした。当時、柿生中学校の校舎改築が具体的な動きとなり、地域の方々を交えた、新校舎の施設・設備などの検討をご一緒にさせて頂きました。その中で、郷土柿生に博物館施設を是非建設しようではないかという話が持ち上がりました。やがて地元住民の方々の輪も広がり、川崎市教育委員会にも何回も足を運び、説得、陳情し、新校舎の中に博物館施設を造ることが実現する運びとなりました。

このような動きの原動力となったのが先生の郷土に対する思いと情熱でした。初代の郷土史料館支援委員長を受けて頂き、カルチャーセミナーでも何回も講師として登場して頂きました。講演をして頂いている時の先生の少年のような目の輝きや溢れんばかりの郷土に対する好奇心は、聴講者の心を釘づけにしておりました。

生前、平成21年に発刊された『麻生郷土歴史年表』は編年体のスタイルで郷土の歩みを克明に記し、当時の郷土の出来事を各ページごとにコラムで綴ったものでした。実に興味深く読ませて頂きました。祖先の歩みの重みがずっしりと伝わってくる圧巻でもありました。

また、先生がお亡くなりになる直前まで、郷土史各時代の重要事項を詳細に研究され、その成果を書きためられておられ、「柿生文化」にも投稿して下さいました。この原稿は先生がご逝去されたのち平成28年、小島澄人氏のご尽力で重厚な冊子『麻生の歴史を探る』として刊行されました。この二つの冊子は郷土の歩みを知るうえで大変貴重な研究冊子であり、後世に必ずや伝えられていくものと確信しております。

近年、「地方消滅」という著書が全国的に評判となり多くの人に読まれました。この本は日本全国の地方都市の多くが人口減少、住民の高齢化、少子化などの問題を抱え、これらの地域が消滅する可能性があるという深刻な課題を提示したものです。これらの課題を抱えた諸都市、地域では地域活性化を目指して手を替え、品を替え努力をしていますが、なかなか良い結果を見出すことができないのが現状です。地域創生という立派なスローガンは提示されますが、なぜうまく行かないのでしょうか。

それは、地域住民の思いを繋げる「核」となるものが明確になっていないことによるものと考えられます。住民のだれもがもてる共通の「思い」すなわち「核」とは、郷土の歩み、言い換えれば祖先の思いを知ることです。先生の残されたこの2冊の著作は、現代人に対して、曾てその土地に生きてきた人々の思いを伝えることのできる大切なメッセージとなるものと思います。祖先の「思い」を知るということは、祭りや伝承、生活習慣、文化遺産等をしっかりと受けとめ、知ることです。そして、知ることのできる場を提供するのが博物館や郷土史料館です。

現在、文化庁が中心となって地域創生を目指して「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」を推進しはじめました。平成29年度には全国98か所の地方公共団体が、例えば「地域創生の核となる博物館実行委員会」や「博物館人材育成事業実行委員会」などを組織して、地域の活性化のため立ち上がりました。まさに、博物館・郷土史料館が地域活性化の「核」となりうることが実証され始めました。

小島一也先生の思いも、郷土の活性化を目指した柿生郷土史料館の設立にあったものと思っています。住民が心をつなげて郷土史料館をもとに郷土を活性化させることは実現可能なことであると確信しています。柿生郷土史料館は未来の郷土に架ける橋です。郷土の歩みや文化を知らずして未来を創造することはできません。

貴重な宝を残してくださった小島一也先生に感謝すると共に、郷土の未来を背負う子供たちや、今日の郷土の文化を支えて下さっている現役世代の皆様のご活躍を心よりお祈り申し上げ、私の思いとさせていただきます。

シリーズ
「麻生の歴史を探る」 第85話

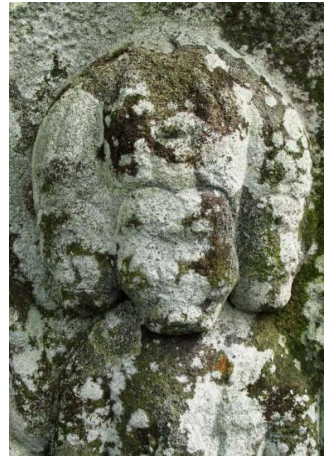
民間信仰 6 石造物～馬頭観音

小島 一也 (遺稿)

観音というと浅草の観音様、鎌倉の長谷観音を連想しますが、観音様とは人々の様々な願いや悩みを三十三態のお姿となって現れ慈悲を下さる菩薩と言われ、千手観音、如意輪観音などがそれぞれですが、馬頭観音もいわゆる六観音の一つとされています。

この馬頭観音の信仰は、すべての苦しみや災害を打ち砕く威力を持つ観音菩薩として信仰が始まりますが、やがては村の強い働き手である馬の無病息災を願うものとなり、特にこの地方では暮らしの中で家族同様だった馬の死を悼み、馬頭観音(塔)の造立となっていきますが、その造立者・馬頭観音像の型は様々です。

市の調査によると(昭60)、市内には確認した石造の観音像が 264 基あり、そのうち、馬頭観音像は 141 基で造立年代は宝暦十一年(1761)頃から江戸末期に及び、そのピークは明治三十四年から大正九年です。物流を馬の力に頼ったその頃、村には馬喰、馬方などの農間渡世の生業があり、これ等の人の造立が多かったのではないのでしょうか(形が小さく未発見が多い)。



岡上小字関の馬頭観音



岡上小字の関、本村橋の傍らには、台座を含め約1.5m余、正面に馬の頭の宝冠を被った3面のお顔を持つ観世音像が浮き彫りされ立っています。台座には馬持講中と記され、天保十年(1839)の銘があります。この馬の頭の宝冠を被った観音が本来の馬頭観世音菩薩で、それは宝冠に示された馬が自由に天空を駆け回り災害を打ち砕いてくれるとしたもので、その3面のお顔の表情は三様と言われています。また、この宝冠を被る馬頭観音は万福寺の土地区画整理事業で設けられた覆屋の中にも2基あり、1基は台座を除いて高さ約60cm、文久二年(1862)二月吉日の銘があり、台座には”村中”と記されており、宝冠を被った観音が浮彫されていますが、残念なことに3面は剥落しています。片方は高さ約70cmとやや大きく同じ馬頭宝冠の観音像ですが、蓮台や光背があり、これには、鈴木、中島、高橋と願主の名が記され、惣村中とあり、天保十五年(1844)造立の銘がありますので、村の有力者が先導して文久の馬頭観音が造立されたのでしょうか。



高石の法雲寺には馬頭観世音信仰を象徴する典型的な石造2基があります。1基は台座5段の石柱型で高さ2m余、馬頭を表す宝冠を被った三面馬頭観世音菩薩が合掌のお姿であらわれており、安政三年(1856)、橘樹郡高石村馬持講中と記されています。並んで建つもう1基は高さ約3m余、直径約50cmの石造物で、上部には馬頭の宝冠を被る千手観音が合掌の姿で浮彫され、円筒の中央には疾走する7頭の馬が刻まれています。造立は明治十五年(1882)で、この頃高石村では競馬が行われており造立者は馬匹組合で地元有志の名が記されています。

一方石柱のみの馬頭観世音と記された文字塔は岡上の丸山(岡上小学校北)に剥離が激しいものの天保十年(1839)造立の銘が読み取れるものが残されており、栗木の京衛(桐光学園東)にも天保十五年(1844)、栗木講中と台座に印した文字のみの馬頭観音が在りますが、その多くは明治・大正の個人の造立で形も小さく、今でも草叢にそれを発見することがあります。



法雲寺の馬頭観音

中段はお顔部分の拡大、下段は疾走する馬

上麻生の浄慶寺には、高さ約1.5m、幅約70cm、正面に馬頭観世音と大きく刻まれた板状の文字塔があり、これは日野往還(現横浜上麻生線)の中村橋際にあったもので、台座は道標となっており、左側面には南神奈川道/西八王子道、右側面には東江戸道と刻まれ、台座中央には上麻生講中、文政十二年(1828)と記され、幕末のその頃、馬と道がいかに密接だったかを物語っています。

参考資料:「市石造物調査報告」「岡上の魅力発見」「歩け歩こう麻生の里」

シリーズ
教育の歩み 第1部

学校の誕生と成長(3)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

◆ギリシア文化の伝播◆

古代ギリシアは、哲学や数学など学問の宝庫と呼ばれるほどに、輝かしい成果を後世に伝えています。ルネサンス絵画の巨匠ラファエロの「アテナイの学堂」には、まさにキラ星のごとく当時の巨星たちが描かれています。こうしたギリシア学は、東ローマ世界(ビザンツ世界)やイスラーム世界に引き継がれたのですが、15世紀に入ってオスマン朝トルコの勢威が上がり、ビザンツ世界の衰退に拍車がかかるようになると、ビザンツの学者や文化人たちは、こぞってヴェネツィアを目指し、そこから安住の地を求めてイタリア各地に亡命してきました。こうした行動は、1453年のビザンツ帝国の滅亡時にピークに達します。こうしたビザンツ世界を通じての、古代ギリシアの文化的伝統の洪水のような流入が、イタリアルネサンスが全盛期を迎えるための大きな原動力となったのです。

ルネサンス期の最初の建築家と称されるブルネレスキは、フィレンツェのサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の有名な大ドーム(クーポラと言います)を、1436年に見事に完成させ、大絶賛を浴びたのですが、彼はギリシア数学とローマの建築技法を学んで吸収していたからこそ、完成させることが出来たと述懐しています。しかしながら、ギリシアやローマに、学校の存在を証拠立てるはっきりした記録は残っていないのです。各地に図書館が作られていたことは知られており、読み書き能力を備えた人たちが、一定数以上存在していたことは、疑う余地はないのですが…

◆遣隋(唐)使の派遣と大宝律令◆

それでは日本はどうだったのでしょうか。日本における文字史料の最も古いものは、刀剣の銘や竹管や木管に記された4世紀のもので、中国の漢字を導入して、そのまま使っていたのです。そんなわけですから有名な厩戸皇子(=聖徳太子)による遣隋使の派遣も、その最大の眼目は、日本からの留学生の受け入れ要請にありました。良く知られる「日出処の天子、書を…」で始まる、精一杯虚勢を張った姿勢で綴った隋の皇帝に宛てた親書も、内実は辞を低くして日本からの留学生の受け入れを願い出たものだったのです。こうして始まった留学生の派遣と朝貢貿易は、隋が唐に替わってからも続き、西暦607年から894年まで300年近くも、続けられたのです。



上海万博に際して復元された遣唐使船

大海を渡る航海が、命の危険を伴った時代におけるこうした留学生の派遣は、当時の日本には未だ次代の支配層を育てるために欠かせない、高等教育機関が存在していなかったことを示しています。自国で育てられないからこそ、隋や唐に辞を低くして、留学生の受け入れをお願いしたというわけです。この低姿勢は成功しました。太子の死から23年後に実現した「大化改新」は、中国の政治体制に対する理解の深まりがあって、初めて可能になったクーデタでしたし、何よりも701年に実現をみた「大宝律令」の公布による律令国家への移行を可能にしたのは、帰国した留学生たちの活躍と、その弟子たちの存在を抜きに語ることは出来ません。

考えてみてください。「701年(8世紀最初の年)に、『大宝律令』と呼ばれる法律集が出来、日本も唐に習って律令国家になりました。」とだけ伝えられても、誰もが「へえそうなんだ」と思うだけです。しかし、この僅か1行の文章の中には、大変なドラマが隠されています。残念ながら大宝律令は、全6巻に及ぶ大部のものだったようですが、全て散逸してしまって、今日には何も残されていません。しかし全11巻に及んだ大宝令の方は、『令集解』に納められた一部分が現存しています。いずれにしても、共に大変盛り沢山な内容であったことは分かります。この長文の律令をどのようにして全国に周知したのでしょうか。現在のようなコピーなんてありません。勿論印刷機もありません。江戸時代のような瓦版屋もないのです。原本を1冊作って、ハイ大宝律令が出来ましたというわけにはいかないのです。そこでは、原本と一言一句違わない写本を、全国に送る数だけ、全て手書きで筆写していく必要があったのです。相当数の書き手が何カ月にも渡って、来る日も来る日も必死の思いで律令の筆写に取り組んでいた姿がそこにあるのです。1字の間違ひでも、意味が全く違ってしまうこともありますから、1字の誤写も許されない厳しい仕事でした。「大宝律令」が公布された背景には、こうした事情が隠されていたのです。

法律文を自在に読み解き、筆写して行くのに十分な能力を持った多数の書記係を、7世紀末~8世紀初頭の段階で、日本も確保する事が出来るようになっていた。厩戸皇子(=聖徳太子)による遣隋使派遣に始まる永年の苦勞は、こうして実を結んだのです。

続く



サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂のクーポラ

第7回史跡見学バスの旅レポート 房総半島の鎌倉時代を訪ねる

11月1日(水)、42名の一行で、房総半島に向かい、頼朝伝説と日蓮上人の史跡を巡ってきました。

皆様の集まりが良く、予定より5分早く7時55分に出発。

浮いた5分は、海ほたるでの休息時間を5分延ばし、みんなで展望台に上って、晴れあがった東京湾の景色を楽しみました。

房総半島に入ってまずは鹿野山神野寺(じんやじ)を見学、紅葉には早かったのですが、深山の静寂の中で、関東では最古の古刹をゆっくり見学できました。宝物館の左甚五郎作の「白蛇」は、見事の一撃でした。

山を下って、一路外房へ。晴れあがった空の下、櫓船に乗り換えて仁右衛門島へ。各自島内を自由散策。仁右衛門さんのお宅や頼朝が隠れ住んだ洞窟などを見学しました。

昼食休憩をはさんで午後は、日蓮上人の史跡巡り、上人が法華經に帰依した清澄山清澄寺と日蓮の誕生の地のほど近くに建てられた誕生時を見学。帰路は、夕陽の落ちた薄暮の空に、富士山のシルエットがくっきりと浮かび、1日の旅を締めくくりました。7時10分帰着。



日蓮大聖人御降誕の聖地 大本山 誕生寺

柿生郷土史料館催物案内 【入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

12月 2・9・16日(毎土曜日) **1月** 7・14・21・28日(毎日曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時 (12月23日は休館です)

第13回 特別企画展

「くらしの窓」に見る柿生地区の今昔 その2 ～ 続 昭和時代の柿生地区 ～

昭和30年創刊のミニコミ誌「くらしの窓」が捉えてきた地域の姿をご紹介しますが、今回は昭和時代の第2弾です。一時中断していましたが、再開いたします。

期間 11月5日(日)～12月16日(土) 場所 柿生郷土史料館特別展示室

第71回 カルチャーセミナー

天皇の諡(おくり名)から古代史の背景を探る

天皇の諡を参考に、古代の王朝交代説や倭の五王はどの天皇なのかなど、古代史の謎とされている事柄をご一緒に考えてみませんか。

講師: 岡田 誠治 氏 (麻生歴史の会副委員長)

日時: 12月9日(土) 午後1時30分～3時30分

会場: 柿生郷土史料館特別展示室

第72回 カルチャーセミナー

東高根森林公園に眠る古代遺跡

柿生から溝の口行きの市バスにゆられて約30分で行ける、東高根森林公園。この公園には神奈川県に選定された、古代の遺跡が眠っています。公園に眠る古代社会に、皆様をご案内します。

講師: 小薬 一夫 氏 (市民ミュージアム主任学芸員)

日時: 1月28日(日) 午後1時30分～3時30分

会場: 柿生郷土史料館特別展示室